極限のなかの人間

「死の島」ニューギニア

尾川正二（おがわ　まさつぐ）
1917年，朝鮮に生まれる．
京城帝国大学国文科卒業，広島大学大学院修了．
桃山学院大学教授．
著書：『野哭—ニューギニア戦記』（創元社），『文章表現入門』（創元社），『原稿の書き方』（講談社），『文章の書き方』（講談社）など．

極限のなかの人間—「死の島」ニューギニア　**筑摩叢書 282**

1983年5月10日　初版第1刷発行
1983年6月30日　初版第2刷発行

著　者　尾川正二
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
電話東京（291）7651（営業）
東京（294）6711（編集）
振替東京6—4123
郵便番号101-91

©1983 Printed in Japan

0021-01282-4604　　多田印刷・永興舎

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが，小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

筑摩叢書　282

極限のなかの人間

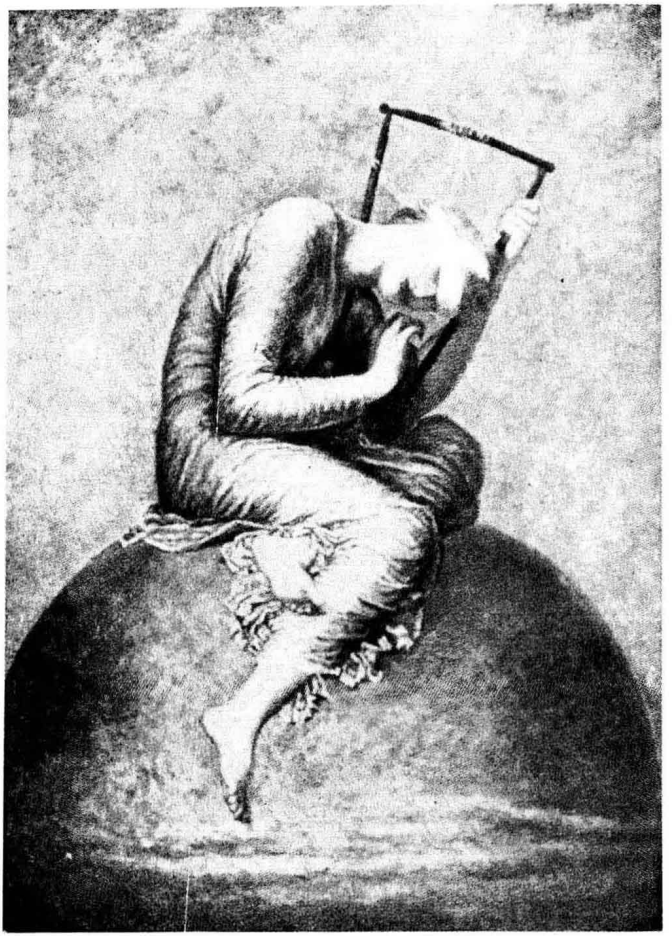
「死の島」ニューギニア

尾川正二

筑摩書房

装幀　原　　弘（ＮＤＣ）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co



希　望　　ウオッツ

「極楽鳥」の島に無絃の絃をまさぐる

「希望」とは望みえない望みであった。

彼は望み得ないのに、
なおも望みつつ信じた。

――ローマ人への手紙　四・一八――

序に代えて

忘れるさびしさにもまさって、忘れうる幸いを喜ぶべきものは、戦争の現実である。にもかかわらず、二十数年間も篋底に秘めていて、ようやく世に出すことを決意した尾川兄の、祈りにも似た悲願に、深い感動を覚える。人間の耐えうるぎりぎりの極限を体験した彼の精神と肉体とが、忘れうる幸いを拒否して、あえてこの決意に達したかどうかは、知るよしもない。だが、二十数年間の沈黙を守り通した気持も、私には痛いほどわかる。すべて「人間」を否定したところに、戦争はあるからである。

原子爆弾によって荒廃した広島の一角、宇品の山寨然とした仮設の校舎で、尾川兄との最初の出会いはつくられた。死の島ニューギニアから、第六部の記述にあるように「二百六十一分の一」のその一名という、まさに奇跡的な生還をされ、一年有余の病床生活のうちに、稀有の体験をつづり、やや体力を養いえて、教壇に立たれたころであった。ニューギニアでの熾烈な体験を、ことば少なく語ってくれたこともあったが、それは、私も中支と比島で戦塵を浴びた一人であったため、いわゆる戦友の語らいともいうべきものであった。おたがいに、ことば数は少なかった。それは、ことばを超えた世界の体験であり、暗黙のうちに、それぞれの「戦争」を理解しえていたからである。

一般に、攻めるは易く、守るは難いといわれ、なかんずく転進作戦または退却は、至難とされている。尾川兄は、ニューギニアで、そのもっとも悲惨な敗退を体験されたのである。飢餓と暑熱と悪疫と弾煙とに責めさいなまれて、人間の耐えうる限界を遥かに超えた環境において、潔癖で内省的な彼が、よくも生き通せたものだと驚くほかはない。生きえたということは、おそらく彼が学生時代に、心身を鍛えたことにもよるものであろうが、私は、もっと大きな理由がなければならないと考える。彼に奇跡的な生還をさせたものは、何であったのか。それは、彼が多くの戦友に愛されていたからではないのか。そして、

彼もまた、深く戦友を愛していたからではあるまいか。そう確信しうるものを、私は、この手記のなかに感ずるのである。それは、時間空間を超えて、われわれの「生きる」問題にかかわるものではなかろうか。したがって、彼のテーマは「あとがき」にあるように、「戦争とは何であるのか」ということと、「人間そのもの」にある。ところどころに、中国戦線の回想が挿入されているのも、そのためであろう。彼の視点は、人間にのみ注がれているといってよい。そこに、単なるルポルタージュをこえた、人間凝視の深さがあり、ある意味で人間学たりえているのではないだろうか。

昭和四十三年十二月八日

西治　辰雄

3 原隊復帰 88
4 彷徨 82

第三部　人と人

1 戦場の倫理 93
2 自然児とともに 95
3 人を愛するということ 99
4 暗い山小屋 102
5 ある兵の死 104
6 ピァビエの韜晦 106
7 Y軍医という人 107
8 M伍長の死 113
9 わが墓穴 115
10 アユスの周辺 118
11 T曹長の死——土民の反撃—— 120
12 生死の岐路 123
13 極限におけるエゴ 124
14 裸の「人間」 127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

西治辰雄

序に代えて

第一部　序幕

1　座礁　13
2　遺書　17
3　原始林にて――ウエワク――　20
4　桃源境　24
5　危機のかげに　29
6　ゴム林にて――マダン――　31
7　出撃　46
8　光と闇　48
9　狂乱　50
10　会戦――フィンシハーフェン――　54

第二部　転進

1　ガリの転進――第一次山越え――　59
2　続転進――第二次山越え――　75

極限のなかの人間

「死の島」ニューギニア

尾川　正二

第一部　序幕

1 座礁

紺青の海は、次第に深さを失って、平板な粘体に見えてくる。釜山港出航以来、五日を過ぎた――。

パラオ。珊瑚礁でできたこの島々は、潮に浸蝕されて、大小の独楽のように浮かんでいる。一望のうちにおさめた風景は、さながら仙境である。ジャンクがゆったりと往き来して、わずかに人間の介入を許している。

抜錨。依然として南へ南へと進路を消化している。遠く近く、魚の群れが、きらきらと海をもち上げている。飛魚が、きちきちと羽を鳴らして戯れる。

ガダルカナルか、ニューギニアか。茫々とした大洋をひた走る。駆逐艦が小さな船体をつんのめらせながら寄り添う。人影が、波をかぶっているのが見える。対潜監視は頭上遙か、マストの天辺に眼を光らせる。

何事もない、静かな航海である。だが、一人一人の胸は、そこはかとない不安にゆらめいている。日一日と、厳冬の装いを剝ぎとられ、熱帯の空気の重さに圧倒されてくる。折り重なるようにつめこまれた船艙は、奴隷船を連想させる。入口の標識は "Baggage Room" なのだ。人間の寝起きするところでは、そもそもないのだ。臭気と熱気のなかの、それは一種もの悲しい荷物だった。急遽とりつけられた大きな吹き流しのような通風口のまわりに、群がる金魚のようにあっぷあっぷしている。冬服を脱ぎすて、支給された薄物に衣更える。その防暑服に、「サイトウ・アキコ」という名が縫いとられており、あえか

東部ニューギニア
(Eastern New Guinea)

な故国への糸を感じさせた。

快晴。

曇天。

スコール。

海霧——。

天象の変化に応じて、われわれの感情も彩られていったが、「戦争」の重石を断ち切ることはなかった。自由な海も、われわれを自由にはしなかった。

快晴。空の青、海の青、「肺青きまで」蒼茫とした「船の旅」である。軽いエンジンの音も、宇宙の鼓動を思わせる。船首は未来を切り、船尾は過去を引きずる。航跡の白い泡沫は縞模様の帯となって、記憶をつなぎとめる。青さをなめつくした眼には、海は滑らかな一枚の絨毯となって盛り上がってくる。オトタチバナヒメノミコトが降り立った「菅畳八重・皮畳八重・絁畳八重」は、そのまま海の形容ではなかったかと思われる。引きこまれるような誘惑さえ感じられる。極大の視界も、

無限に向かって突きぬけてゆくことはない。のしかかってくる重さが、放心をさまたげるのだ。

海霧。乳色の帳だ。いびつにゆがんだ船体は、紡錘形の平面となって、落ちつきのない運動を始める。しゅうしゅうと波を引き裂く音、エンジンの音も重い。極小の視野のなかの安らぎと不安との怪しい混淆——。

いろいろな想定のもとに、絶えず訓練はつづけられてゆく。敵前上陸・縄梯子による岩壁登攀・甲板上の駆け足……。魚雷をくらったら、あわてず水筒一本持って甲板に上がれ、空ならば浮き袋の代りになり、水がはいっておれば飲料となるのだ、という。合理的ではあるが、知恵の限界もそこまでである。魚雷に対処すべき手だてが、水筒一つなのだ。水筒をもって、海に浮かんでいる図は想像できる。だが、それから、どうなるのか。魚雷など、決してくらわないという前提を信ずるほかはない。

ごろごろと、倦怠とから陽気のうちに日は過ぎていった。たわいもないさざめきは、大きな不安から強いて眼をそらそうとする擬態でしかなかった。絶えずさざ波を立てながら、おたがいの連帯感を確かめあっていたといっていいだろう。

いまにして思えば、それはニューギニアの三年間を象徴するような事件だった。ゆるやかな動揺に身をまかせていたのが、一ぺんに三、四メートルもすっとんでしまったのである。ガガガガという不気味な音響とともに。瞬間、顔を見合わせた。「やられた！」という声、声にならない声が乱れとんだ。ぐっと船は傾いた。停止した。つぎにくるものは？　とにかく、金科玉条とするところを実践した。ところが、説明のつかないおかしさが、不安のなかを突きぬけてきた。おれというものが、どこかに行ってしまって、水筒を大事そうに身につけようとしている男を眺めているのだ。やっぱり、拾いやがったな、そんな気がした。妙に客観的になってしまって、鈍重に自分と向かいあっていた。人の動きも眼に入らず、何かを期待しながら、異様な静寂を感じていた。

やがて、「座礁した。心配しないで、もとの位置につけ」という伝令がとんだ。数分間の深刻な危機感から解放され、陽気な饒舌が堰切ってあふれた。おれ自身、その間にどんな変化があったかを思いめぐらせてみた。ひとりぼっちで、死の深淵に向かって突き進んでいるのかも知れないと思いながら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com